

## 教職専門実習Ⅱを振り返って ～想像力と対話が経験を紡ぐ～

佐古 清（実務家教員）

### 1 はじめに

専門実習Ⅱの開始から数日後に「緊急事態宣言」が発令され、休校期間中は自宅実習に切り替わった。現場実習が縮小したことによる M2(実習生)の経験の損失は、甚だ大きいと言えよう。しかし、その状況を逆手にとって少しでも学びが深められないかと考えたのが、実地教育運営委員会の教員たちである。まさにコロナ禍が全世界を巻き込んで拡大していた時期である。これまで当たり前と思っていたことが当たり前でなくなり、より本質的なことを議論する磁場がいたるところで生まれていた。この時期にじっくりと思索できる環境に身を置くメリットを、院生には最大限に活かしてもらいたかった。

筆者は、京都府の宇治中、城陽中、泉ヶ丘中、京都教育大学附属桃山中の4中学校で実習する8名を担当した。自宅実習に切り替わるにあたって、以前に京都大学のカール・ベッカー教授から伺った話を紹介した。「学生が海外に1年間ほど留学してくることが多いのですが、留学してきた学生の方が日本で学んだ学生よりも外国の理解が深まったかという点、必ずしもそうではないんです。国内で勉強した学生の方が、理解が深いということが実際にあるんですよ」と。自宅実習に求められるのは、国内（自宅）にいて海外（学校現場や児童生徒）のことを深く理解することができた学生の学び方であろう。その鍵となるのが「想像力」と「対話」ではないかと考え、双方を豊かにする「場」の設定を心がけた。

### 2 「場」の設定

#### (1) オンライン合同省察会

Zoomの経験がなかった筆者は、はじめの数回を経験のある院生から招待してもらってオンラインの合同省察会を始めた。画面上ではあったが、互いの顔を見て話をするたび、実習生が見せた安堵の表情が忘れられない。それぞれ自宅や下宿先で一人実習を続ける院生にとって、互いに顔を見て近況や思いを伝え合う場があることの意味は大きかった。週末毎に持った合同省察会では、一週間の実習状況に加えて各自の気づきや問題意識などについて報告し合い、意見を交換した。話題は、「コロナ禍の中で学校ができること」「9月入学」「教育格差と学力保障」「不登校と学校の役割」「ICTを活用した授業改善」「コロナ禍での学び合い活動の工夫」「学校再開後の学級集団づくり」など多方面に広がった。この場では議論を深めるところまでは至らなかったものの、今後も問い続けたいテーマとの出会いを通じて意識が高まったのは確かである。

#### (2) 共有フォルダの活用

自宅実習、とりわけ合同省察会をとおして得られた気づきや感想を各自が文章にし、KUE Cloudの共有フォルダで交流するようにした。実習日誌の記録についてもPDFにして共有フォルダに挙げることで、実習の内容や成果を相互に確認し合うことができた。実習生は、他の院生の考えや学び方の工夫に触れて大いに刺激を受けたようだ。コロナ

禍の学校現場で想定される様々な場面や課題について想像力を働かせながら議論したり、自らの考えや気づきを言語化したりすることで、自宅実習であっても相当程度省察を深めることができたと評価している。これこそコロナ禍での一つの経験と言える。

### (3) メッセージの配信

教員からは、ゼミ通信と校長通信（筆者が昨年まで勤務した学校で教職員に向けて出したもの）をメールに添付して配信した。それぞれの通信名「Empowerment／エンパワメント」のとおり、自宅で学ぶゼミ生を励まし、少しでも学校現場の具体的に触れさせたいとの思いで配信を続けた。通信に載せた、書籍からの抜粋（教育関係に限らない）やメッセージがゼミ生を触発することも期待した。すぐに感想や意見を返してくれるゼミ生もいて、一定の手応えを得えられた取組である。

### (4) 実習校からの指導

実習校からは、自宅実習中も継続して指導をいただくことができた。実習生は、指導案と実習日誌とを PDF で実習校に定期的に提出し、それを基に指導教員から丁寧な添削指導や助言をいただいた。コロナ禍での学校現場の状況や生徒たちの様子についても話を伺うことができ、的確な助言を活かして指導案を練り上げた実習生は少なくない。今思うと、上記の合同省察会とは別に、実習校の指導教員にも加わっていただくオンライン省察会があれば、自宅実習をさらに充実したものにできたらと少々後悔が残る。

## 3 院生の学び

数日ずつであったが、期間の最初と最後に準スタッフとして学校現場に入ることので得られた学びは貴重である。折しも、前半はコロナ禍の中で新年度を始動する時期に当たり、後半は休校期間を経て生徒を迎え入れる時期と重なった。教職員による大変な準備作業や感染予防の工夫、学びを止めないための取組や個々の生徒への細やかな配慮、それを支える先生方の熱意と協働。歴史的な非常事態に教育活動のバックヤードをつぶさに体験することができたことは幸いであった。また、実習日誌からは、院生が昨年の専門実習Ⅰの体験を基に省察を深めていることが読み取れる。専門実習Ⅰを通じて見えた自身の課題についても一度振り返りを行い、大学院で学んだ知見を参照しながら考察がなされている。生徒との関わり方を客観的にシミュレーションし、授業のスキルアップにも努めていた。

## 4 おわりに

2学期以降、多くの院生が非常勤講師や支援員として相当な日数を学校現場に入っている。この間、専門実習Ⅱで得るはずだったものを補って余りある経験を積んでいるようだ。筆者は、院生自身が自らの学びや実習の体験を、人間教師としての成長につながる経験へと高められるかどうかを肝だと考えている。その舞台となるのが省察の場であり、そこには「想像力」と「対話」が深く関係している。微力ではあるが今後も実務家教員として、院生を中心に据えて学校現場、大学院、教育行政の関係者をつなぎながら省察の舞台づくりに努めていきたい。また、教職大学院として、院生の経験の質をさらに高められるような専門実習と省察の在り方、それを実現する仕組みをさらに追究していく必要があるだろう。